分科会D

近代日本研究におけるアジア的視点

日本はいつ「東洋」の国になったのか

—トルコから見た近代日本とその位置づけ—

ジェミール・アイドゥン

今年の２月、東京で「日本のアイデンティティ：東洋でも西洋でもない日本」というシンポジウムが開かれました。そこでは、日本は「何でないのか？」という問いがなされ、「日本は西洋ではない。しかしまた東洋でもない」というのが想定されていた結論のようでした。そしておおかたのパネリストは、西洋でもなく東洋でもなければいったい何なのか、という点では意見の一致をみなかったものの、「西洋でも東洋でもない」ということについては異論はないようでした。ここでは「西洋」や「東洋」は日本とは独立した実体として前提にされており、そのどちらに日本が「属するか」が問題にされています。

このような「西」や「東」のとらえかたの問題点はさておくとしても、「西洋でも東洋でもない日本」という結論は、19世紀末以来、中東で日本について書かれてきた膨大な文献というものが視野に入れられていないという印象を受けます。この時代の中東では日本は「東洋」の一国であることはもちろん、その潜在的リーダーであり模倣すべきモデルととらえられているからです。たとえば、エジプトの民族運動のリーダー、ムスタファー・カーミル Mustafa Kamil（1874-1908）が、日露戦争開戦直後の1904年に出版した日本についての有名な紹介書のタイトルは、『昇る太陽 *al-Shams al-Mushriqa*』というものです。

「西洋」や「東洋」、「東」や「西」はいうまでもなく実体というよりは関係性です。実体がないというのではなく、その中身や内容は「関係性」、つまり誰と誰の関係なのか、また「誰に対して」主張されているのかによって変わります。

トルコにおいて日本に関する研究は今のところまだ発展段階にあります。ですから、ここでトルコの日本研究よりトルコにおける日本のイメージと、トルコ人が日本人を同じアジア人あるいは東洋人と意識するようになった過程について話したいと思います。日本の近代化の成功はトルコ人の思想形成において、重要な役割を果たしてきました。これからその役割と今後のトルコの日本研究のあり方について検討したいと思います。

イスラム世界とオスマン帝国の日本のイメージ（1830年代まで）

18世紀まで、日本は、イスラム世界の中でほとんど知られておらず、知的関心を持たれない国でした。イスラム世界の歴史家と地理学者は、日本の存在について中国の文献によって初めて知ることとなりました。例をあげてみると、イル・ハーン朝の歴史家ラシード・アッディーン Rashid al-Din（1247－1318年）の『集史』や、11世紀のトルコ人カシュガリーMahmud al-Kashgari の著作『トルコ語

アラビア語辞典』（1076年）の中に日本に関する説明がわずかにですが書かれています。しかしほとんど関心を持たれることはありませんでした。

17世紀になると、ヨーロッパから日本に関する新しい情報が入ってくるようになりました。オスマン帝国の有名な知識人であったキャーティブ・チェレビーKatib Çelebi（1609－57年）の『世界の鏡Cihannuma』の中には前出の情報よりも詳しいことが記載されています。 しかし、これもまたトルコ世界においてはそれほど意味を持つものではありませんでした。

ここでオスマン帝国のムスリムがもっていた日本観と中国観とを比較してみることにしましょう。18世紀以前の色々な本にある中国に関するイメージから見ると、トルコ人にとって中国は、「法と秩序と正義」という言葉に反映されているように、模範となる国でした。これに対し日本は、何ら肯定も否定もないただそこに存在するだけの国でした。

ヨーロッパ文明に開かれた国としての日本観（1850年代－80年代）

19世紀にはいって交通・情報網の発達により、世界が縮小され、それまでの中国と日本に対するイメージが劇的に変化しました。またそのころまでにヨーロッパ諸国が力を持ったため、ヨーロッパ文明が最も優れたものであると、オスマン帝国ではみなされるようになりました。当時のオスマン帝国のエリートたちは、ヨーロッパがほんの2—300年の間に急激に進歩した理由を模索しはじめました。彼らの見解によるとヨーロッパの急激な発展の要因は、科学技術・産業・教育によるものであり、オスマン帝国が改革を押し進めることによってヨーロッパ諸国に追いつくことができるという楽観的なものでした。

また、この時代オスマン帝国のエリートたちは、ヨーロッパの文明概念の影響で、中国と日本に対してはそれぞれ否定的なイメージをもっていたと言えます。そのため、中国を後進性の象徴と考えていました。例えば、中国がアヘン戦争に負けた理由は、ヨーロッパから学ぶことをせず、改革をしなかったからであると解釈し、トルコの近い将来に同様の危険性を感じるようになりました。したがって早急な改革、変化をトルコは必要としたのです。

1850年代から、トルコ人の中には、日本は、長年の鎖国がヨーロッパとの文明交流、知識交流の欠如をもたらし、日本を駄目にしていたと考える人々が出てきました。つまりヨーロッパから学ばない、ヨーロッパと知的交流をしない国は成功しないと考え、改革論が強まりました。例えば、1866年、つまり明治維新より前のオスマン帝国の最初の雑誌と思われる Macmu'a-i fünun に、日本についての長い記事が載りました。ここでは開国によって日本が文明発展の道に入ったという意見がありました。この記事による日本のイメージは中国と比べればある程度肯定的だったとも言えます。

19世紀の前半は、東洋あるいはアジアという文明の概念自体が存在しておらず、世界文明は唯一であり、ヨーロッパは最高レベルであると思われていました。 トルコ、中国、日本、インド、アフリカ は文明段階ではヨーロッパと比べて低いけれども、レベルアップできると考えられていました。1870年代までは、文明の発展レベルでいえば、トルコは日本より高いと思われていました。トルコは、ヨーロッパをモデルとする改革を日本より少なくとも50年前に始めていたためです。

日本とトルコは同じ東洋の社会に属すという見方は、まだありませんでした。違う文化という意識は曖昧にありましたが、19世紀の前半にこれは文明の発展とは無関係と思われていました。

「東洋」の一員としての日本（1880年代～）

1820年以降、オスマン帝国は改革を続けていましたが80年代になってヨーロッパとの格差が縮まらないことに悲観的になりはじめました。その格差の理由をヨーロッパ人は自分達の精神、文化、血によるものであるという一種のヨーロッパ至上主義で説明するようになりました。西洋は西洋であり 東洋は東洋であり、東洋諸国が改革をどれほど押し進めても、西洋文明に達することはないという考え方に、トルコ人は精神的に支配されていました。日露戦争がこの点で大切な役割を果たしました。

ところで、トルコの日本に対する関心が日露戦争の10年まえ、つまり1890年代から高まり、多数の本や記事が書かれるようになりました。そして、日本が日清戦争・日露戦争に勝利を収め、アジアの国が近代化できるのだという概念が形成されたのでした。また、トルコ人による日本人論がいくつか執筆されました。しかしながら、彼らの議論は、直接日本に赴いて得たものではなく、ヨーロッパを介したものでした。こうした本や記事の中でトルコ人が最も注目した点は、日本がどのように成功したのか、また、自分達がそこから何を学び生かしていくのか、ということであったといえます。

ここで、ひとつ忘れてはならないことがあります。その時トルコ国内では改革の方法について様々な論争が繰り広げられており、人々が自分の立場に有利になるように日本を解釈していたと言う点です。彼らは日本の例を用いて自分達の政治的・思想的な立場を強め、世論に影響を及ぼそうとしていました。

このような状況の中で、日本が成功した理由として主に２つの見解が出されました。一つは、当時の日本の国際環境がトルコに比べてよかったという主張です。 トルコにとってはヨーロッパ諸国との衝突や、文化的対立が発展の障害だったというものです、これには地理的な要素も含んでいました。そのためヨーロッパから遠く離れており、単一民族国家である日本は近代化の過程の中で特に支障もなく進んだのに対し、逆に、トルコは多民族国家であるが故に大きな問題を抱え、それが近代化の妨げとなったという主張です。この主張の主な支持者はアブデュルハミト２世 Abdulhamit II（在位1876-1909）のような指導者階級の人々でした。彼らは日本の成功とトルコの失敗は運命的に決まっていたことでありトルコ人指導者の失敗ではないと言いたかったのです。

これに対するもう一つの見解は、日本人が選んだ近代化の普遍的な方法が成功を招いたというものです。日本人の特質である愛国心、勤勉さに加え、憲法制度や教育制度、優秀な指導者がいて、西洋に劣らない力を生み出したとし、これが今トルコに最も必要なものであると主張しました。ナショナリスト達とイスラム主義者と欧化主義者がこの見解を支持しました。彼らは常に日本を東洋的な近代化とナショナリズムの指導モデルとするイメージを創り出しました。そして、後者の見解がトルコにおいて広く支持され、日本は、東洋諸国における代表的な近代国家の規範としてとりあげられることになりました。

これに加えて、思想的・精神的に、日本はトルコにとって重要な位置を占めていたといえます。その理由の一つとしては、東洋が西洋のレベルに到達できる可能性を日本に見出したことです。

更に、選択的に西洋文化を摂取し、伝統文化を保護しつつ近代国家の形成が実現可能であるという、東西文明融合論が普及したこともあげることが出来ます。これは一つの理想像として以前からトルコ・ナショナリストとイスラム主義者の間に存在していましたが、日本の成功によりこの意識は高まっていました。

このような日本に対する共感と尊敬の結果として、1890年代—1920年代の間に、トルコ人は日本と

同じアジア人であるとする連帯意識が生まれたのです。ここで東洋社会という概念が積極的に受け入れられるようになりました。以前は東洋文明は西洋文明に比べて歴史が長く、長老のように精神的に優れてはいるが、若い西洋文明の攻撃を受けて消え去ってしまうという心配がありました。したがって、イスラム文明をどのように若返らせるかという議論が起こっていました。そのような状況下、一部の知識人のなかには、東洋文明を破棄し、西洋文明を完全に吸収しようとする考えが生まれました。これに対して、日本の例を用いて東洋文明の復活を試みる者も出てきました。東洋・アジアの復活という理想のもと、同じ東洋人である日本と協力しようと考えるトルコ人が増えたのです。

日本人論の形成に大きな影響を与えたタタール人ムスリム、イブラヒム Abdürreshid Ibrahim (1857-1944) は、1909年に初来日し、1910年に日本に関する本を出版し（日本語訳、小松香織・小松久男『ジャポンヤ』)、イスラム主義的な改革論を打ち出す根拠として、日本の例を取り上げました。つまり、日本は従来の道徳と自分の伝統を守りながら、西洋の文明を取り入れ、近代化に成功したのだというのです。この議論は メフメト・アーキフ Mehmet Akif Ersoy (1873-1936) がイブラヒムの旅行記に触発されてかいた詩によって、多くの保守的なトルコ人の間に受け入れられました（日本語訳、杉田英明後掲書、p.229-231)。したがって、トルコ共和国の西欧化革命の時代に、革命を批判しているトルコ人は、多くは日本の例をあげて、近代化するために、つまり進歩するために日本のように自分の文化と宗教を守ることが大事であると主張していました。例えばトルコの文字改革の時、アラビアの文字が難しすぎ、 かつイスラム文明が伝統的過ぎるため、ラテン文字に変更される時に、この改革に反対する人々は、日本の漢字の例を挙げて、難しい文字でも進歩に障害がいないと主張しました。日本人は、自分の伝統と文化を近代化しながら、大事に守ったという主張は、トルコ人の中で1980年代まで続きました。

結論

日本がトルコにおいて「東洋」の国と位置づけられ、同じアジアの一員として日本との連帯をはかろうとするような気運をトルコで生みだしていった経緯を見てきました。ここでこの「東洋」という言葉の意味をもう一度考える必要があります。トルコにとって「東洋」は当初実体のない概念であり、ましてトルコ自身がそこに位置するなどとは考えられていませんでした。しかし西洋化を目指す改革の中で、ヨーロッパ文明を最高とする西洋文明至上主義、さらにはイスラムと西洋文明は決して相容れないとする東西文明論、そしてオリエンタリズムといった思想にトルコもとりこまれ、その中でトルコは「非西洋」、「東」の側に位置づけられていきました。東西文明論やオリエンタリズムはもちろん「東」の側、「オリエント」の側にとってはネガティブな理論ですが、トルコの知識人はこれを積極的に再定義しました。ところで日本の台頭という状況によってこれらはむしろトルコと日本をつなぐ枠組みとしてトルコでは用いられていきます。日本もトルコも「西洋でない」という以外には、宗教的にも歴史的・文化的にも何の共通性もなければ関係もありません。しかし「オリエンタリズム」という、トルコにとっては有難くない枠組みを取り入れ、その中で日本が「東洋」に位置づけられることでトルコと日本は「東洋諸国の一員」という共通項をもつことになったわけです。また日本の成功を「東洋の国」の成功とみなすことで、トルコは西洋文明至上主義やオリエンタリズムに対抗する議論の例をもつことができたのです。その意味で、トルコにとって日本はあくまで「東洋」であり「東」でなくてはならなかったので

す。

最後に、トルコの日本研究という点から一言申しますと、これらの背景から創り出された日本に対する肯定的で、ある意味で神話的なイメージは、現代のトルコの日本イメージに反映しています。しかし、これからの課題としては、トルコで日本研究を行うときには、日本の近代化の過程で生じた負の側面、例えば帝国主義、植民地主義、天皇制、軍国主義などの現象にも注意を向ける必要があると私は思います。

Bibliograhpy:

Abdulhamid'in Hatira Defteri: Belgeler ve Resimlerle, Yayinlayan ve Sadelestiren: Ismet Bozdag, Istanbul, Kervan Yayinlari, 1975.

Abdürreshid Ibrahim, *Alem-i Islam ve Japonya'da Intisari Islamiyet* (*Islamic World and the Spread of Islam in Japan*), 2 Volumes; First Volume: (1328 in *Muslim Calendar*; 1908). Istanbul, Ahmat Saki Bey Publishing House. Second Volume: (1329-1331 in *Muslim Calendar*; 1909-1911), Istanbul, Kader Publishing House.（小松香織・小松久男訳『ジャポンヤ』第三書館、1990）

Albert Hourani, *Arabic Thought in the Liberal Age 1798-1939*, Cambridge 1983.

Bernard Lewis, *The Muslim Discovery of Europe*, W.W. Norton-Company, New York, London 1982.

Dialogue, *Middle East and Japan: Symposium on Cultural Exchange*, The Japan Foundation Conference Proceedings, November 1977.

Donald Keene, *The Japanese Discovery of Europe, 1720-1830*, Revised Edition, Stanford University Press, California 1969.

Hideaki Sugita, *Nihonjin no Chuto Hakken*, The University of Tokyo Press, Tokyo 1995.（杉田英明『日本人の中東発見』東京大学出版会、1995）

Islamic World and Japan in Pursuit of Mutual Understanding, The Japan Foundation Conference Proceeding. October 1981, Tokyo.

Katip Çelebi, *Hayati, Kisiligi ve Eserlerinden Secmeler*, Turkiye Is Bankasi Yayinlari, Istanbul 1991.

Kunio Katakura and Motoka Katakura, *Japan and the Middle East*, The Middle East Institute of Japan, Tokyo 1991.

Mehmed Sevki, "Japonya Memleketi", *Mecmu 'a-i Fünun*, nr.41, Saban 1283/December 1866, p.314.

Mehmet Akif Ersoy, *Safahat, Ed: Ertugrul Duzdag*, Iz Yayincilik, Istanbul 1991.

Mian Abdul Aziz-(Former President of the All-India Moslem League), *The Crescent in the Land of the Rising Sun*, Blades Ltd., Abchurch Lane, London 1941.

Munif Pasha, "Mukayese-i Ilm ve Cehl", *Mecmu 'a-i Fünun*, volume: 1, Number:1, Istanbul 1863.

Mustafa Kamil, *al-Shams al-Mushriqa*, Cairo, 1904.

Robert N: Bellah, "Religious Aspects of Modernization in Turkey and Japan", unpublished and undated paper, available at Harvard Library.

Ronald A. Morse, ed., *Japan and the Middle East in Alliance Politics*, The Wilson Center: Asia Program/International Security Studies Program Conference Report. 1986.

Sati al-Husri (he has a book called *Buyuk Milletlerden Japonlar*, Almanlar, Istanbul 1911)

Selcuk Esenbel, "Islam Dunyasinda Japonya Imgesi: Abdurresid Ibrahim ve Gec Meiji Donemi Japonlari", *Toplumsal Tarih*, Number: 19, p.18-27.

Serif Mardin, *Religion and Social Change in Modern Turkey: The Case of Bediuzzaman Said Nursi*, Albany, 1989.

Sukru Hanioglu, *Bir Siyasal Dusunur Olarak Abdullah Cevdet ve Donemi*, Istanbul, Ucdal Nesriyat, 1981.

Sukru Hanioglu, *The Young Turks in Opposition*, Oxford, 1995.

William Cleveland, *The Making of an Arab Nationalist: Ottomanism and Arabism in the Life of Sati' al-Husri*, Princeton 1971.
id., *Islam Against the West: Shakib Arslan and the Campaign for Islamic Nationalism*. University of Texas Press, 1985.

本原稿は英文原稿をもとに短くまとめ直したものです。英文原稿をご希望のかたは、caydin@fas.harvard.edu までご連絡下さい。

中国から見た近代日本

―満洲国期を中心に―

井村　哲郎

はじめに

1931年９月の満洲事変勃発後，翌32年３月１日の満洲国建国によって日本は中国東北と内モンゴルの一部を全面的に支配するにいたった。満洲国は1945年８月の日本敗戦によって消滅したが，その間ほぼ14年間にわたって，日本はこの地域を支配した。満洲国は清朝最後の皇帝溥儀を執政（後，皇帝）とする日本の傀儡国家であった。満洲国の統治にあたっては，大臣などのトップのポストは中国人やモンゴル人が占めていたが，これはいわば「飾り」であり，実質的な権力はその下の次長の地位を占める日本人官僚が握った。日本から官僚が派遣され満洲国経営の中枢を占めていたのである。さらに満洲の地を軍事的に支配し，対ソ作戦準備を行っていた関東軍は，満洲国をいわゆる内面指導によって支配していた。経済・社会の面でも同様で，主要な経済機構は日本資本がおさえていた。満洲国は農業国であったが，農業においても，生産・流通・金融面ともに旧来の中国側の機構を破壊し，さまざまの統制によって日本による支配を貫徹しようとした。日中戦争開始後に国策として標榜された「日満支」経済ブロックは，大日本帝国と日本の支配下にあった満洲国，華北を一体化しようとするものであったが，これは日本の戦時経済体制確立のためであった。満洲国では経済開発計画を作り重化学工業の建設をめざしたが，そうして開発された主要資源は，ブロック化によって日本の戦時経済下での軍需物資として利用された。

こうした実態とは別に，満洲国に実際に関わった人たちを中心に，「王道楽土」，「日満一徳一心」，「五族協和」など満洲国において掲げられていたスローガンを心底から願っていたとする見解が往々にして見られる。彼らの主観的な願望はともかく，そのようなスローガンの裏では，実際には日本による過酷な支配が行われていた。そうした実態は，さまざまの資料や研究文献によって明らかにされている[注1]。

満洲国は日本によって人為的に作り上げられた国家であり，また，東北は中国の一部であるために，満洲国においては，反満抗日運動が執拗に行われ，また国民政府系，共産党系の軍事地下勢力が日本支配を脅かした。このため，満洲国では，関東軍，関東憲兵隊によるそれらの勢力の弾圧が，とくに初期には軍事・政治上の最重要課題であった[注2]。

日本における満洲国研究

これまでに日本における満洲国期に関する著作には,満洲国に関わった当事者の回想(中帰連の人々[注3]